

K250.32

1

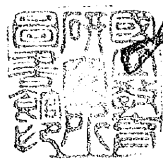
1i



くいのあゆみ上

文部省

くにのあゆみ
上



文部省

もくろく

第一 日本のおけぼの	一	第四 地方のありさま	一八
一 歴史のはじめ	一	五 武士のおこり	一九
二 大和の朝廷	二	第四 武家政治	二三
三 大陸文化のうけ入れ	四	一 鎌倉幕府	二三
第二 開け行く日本	六	二 社会と文化	二五
一 聖徳太子	六	第五 鎌倉から室町へ	二九
二 大化の改新	八	一 建武のまつりごと	二九
三 奈良の都	九	二 室町幕府	三一
四 外国との交はり	一二	三 経済と文化	三四
第三 平安京の時代	一五	四 新しい時代への動き	三六
一 平安の都	一五	第六 安土と桃山	四〇
二 藤原氏の榮え	一六	一 國內の統一	四〇
三 はなやかな文化	一七	二 外交と文化	四二

第一 日本のあけぼの

一 歴史のはじめ

アジア大陸の東の海に、北から南へかけて細長くつらなる島島、これが私たちの住んでゐる日本です。暑さ寒さもあまりきびしくなく、ほどよく雨がふり、草や木が生ひしげり、四季のながめも、それぞれちがつたおもむきがあります。

大昔の生活 この國土に、私たちの祖先が住みついたのは、遠い遠い昔のことでした。はつきりしたことばかりありませんが、少くとも数千年も前のことにちがひありません。世界のどこの地方でも、文化の開けなかつた大昔には、人はまだ金属を使ふことを知らず、石で道具を作つて、用ひてゐました。かういふ時代を石器時代といひます。私たちが、あたたかい南向きの

をかなどを歩いてゐると、ときに島の中に貝がらが白くちらばつてゐるのを見かけることがあります。これは、そのころの人人が、はまぐりやしじみなどを、ひろつて食べた貝がらがつもつてできたもので、これを貝塚といひます。貝塚からは貝のほかに、魚やけもの骨や、そのころの人人がふだん使つてゐた道具などがほり出されます。これらによつて、大昔の人人がどんな暮らしをしてゐたかがわかります。

狩りをするのと魚をとるのが、そのころの人人のおもな暮らしでした。野山に出ては木の実をあつめ、石のやじりをつけた矢を用ひ、鹿や雉のししをとつて食べ物としてゐたのです。また島國ですから、海で貝をひろひ、鹿の角で作つたもりやつりばりを使つて、魚をとることも多かつたやうです。食べ物を入れたり、

にたきをするのには、土のはちや、かめが使はれました。これらの土器には、大てい、なほ目のもやうがついてゐます。

生活の変化 やがてこのくらし方に、大きな変化がおこつてきました。それは海の方かふから、田をたがやして稻を植ゑる方法や、金属で道具を作るわざがつたへられたことです。私たちの祖先がまだ石器を用ひてゐたころから、おとなりの支那では、銅に錫をまぜた青銅器を使ひ、やがて鉄器を使ふやうになりました。これらが日本にもつたはり、金属の道具を用ひるやうになりました。青銅の剣やなどは作られ、また鉄の道具もできました。土器も新しいものが使はれるやうになりました。

農業のはじまり 農業がはじまつたので、生活が一段と進んできました。水田に稻を植ゑる方法がひろまると、人人は年々これをたがやして行くために、きまつた土地に住みつかなければなりません。かうして

の大事な仕事をおはじめになり、畝傍山のふもと、橿原の宮で、最初に天皇の位におつぎになつた方が、神日本磐余彦天皇といはれてゐます。

大和の朝廷の勢力は、それからしだいに地方にのびて行きました。出雲の國を治めてゐた勢ひのあるかしら、大和の朝廷のもとにつくことになりました。しかし大和から遠くはなれた地方には、まだ開けてゐなかつたところが少くありませんでした。關東から奥羽の地方にかけては、蝦夷が住み、九州の南のはしには熊襲が住んでゐました。朝廷ではおひおひこれらの人も、すべて一つにするやうにつとめました。かうして、大和の朝廷を中心に、日本は一つの國をかたちづかつたのであります。

氏と姓 遠い昔、多くの人人は農業にはげんでゐました。世の中が進むにつれ、農業のかたはらに、土器や玉など、手のこんだ品物を作るのを仕事とする人もあらはれました。人人の大部分は、直接朝廷に仕へた

あちらにもこちらにも、人人の集り住む村ができ、村の人人は力をあはせて、田植や取り入れにはげみしました。また力を出しあつて池やみぞをほつて水を引き、野原を開いて水田とすることにつとめました。

世の中が進むにつれて、すぐれた人が出て、多くの村をまとめてさしづをするやうになりました。かうした集りが方々にできました。中でも文化の早く開けた九州の北部や大和の地方には、勢ひのあるものがあるはれ、中には大陸に渡つて支那の文化をとり入れるものも出できました。このやうな日本が一つの國家にまとめあげられてできたのが大和の朝廷であります。

二 大和の朝廷

國のおこり 大和は今の奈良縣にあたる地方です。緑の山山にかこまれたこぢんまりした盆地であります。そのころ最も有力なものが、この盆地からおこつて、だんだん日本を一つにまとめたのであります。こ

のではありません。地方には、それぞれ身分の高い人がゐて、人民や土地を治めてゐました。この人人は同じ血すちのものがより集つて、氏をつくり、その上に立つ人が、その氏をひきゐて朝廷に仕へたのです。氏には姓といふ身分があつて、家からの高さをあらはしました。氏の中には、朝廷に出て役目をうけもつてゐるものもあります。たとへば、蘇我氏は朝廷の藏の出し入れをうけもち、大伴氏と物部氏は朝廷をまもるのを役目としてゐました。その役目は、代代その氏でうけついで行つたのです。

古墳 世の進むにしたがつて、人がなくなると、土を高くもり上げた、りっぱな墓をつくるやうになりました。これを今、古墳といつてゐます。大てい、まゐる形をしてゐますが、大陸に見られない前方後圓の形をした小山のやうなものもあります。中でも應神天皇・仁徳天皇の御陵などは、きはだつて大きなものであります。これらの古墳からは、家や人や動物の形を

した埴輪が発見され、鏡や玉や刀や、よろひ、かぶとなどもほり出されます。これらの品物を見ると、そのころの人人の生活のありさまがよくわかります。

三 大陸文化のうけ入れ

朝鮮との関係 支那は、世界のうちでも最も早く文化の開けたところの一つです。その支那に漢といふ強い國がおこり、やがて朝鮮半島の北の方にまで、勢力をひろげてきました。これは今から二千年あまり前のことです。早くもこのころから、九州の北の方の人人は、半島に渡つて、その進んだ文化をとり入れることにつとめてゐたのです。そのうち半島の南の方に、百濟と新羅の二國ができ、また長く漢の勢ひがおよんでゐた北の方には、高句麗がおこつてきました。大和の朝廷は、國內をまとめたのち、半島の南のはしにある任那と手をにぎつて、とくにしたいし間がらとなりました。やがて任那が新羅や高句麗におびやかされた

とき、兵を送つてこれをたすけました。それからのかへつて半島の國國と、一そう深い交はりを結ぶことになりました。

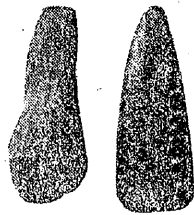
漢字と儒教 かうしてわが國と半島との交はりが深くなりましたので、半島や支那本土から大陸の文化が盛んにはいつてきました。應神天皇・仁徳天皇の代から、ことにそれが目だつてきました。漢字がつたはつたのも、孔子の説いた儒教の教への知られるやうになつたのもこのころのことです。大陸や半島からたくさんの人々が渡つてきて、わが國に住みつくやうになり、それにつれて、養蚕・機械・裁縫・鍛冶などの、進んだわざもつたはりました。朝廷は、これらの人人をこころよく迎へ、はたらきのある人には、重役目や高い身分をあて、十分にうでをふるはせました。このやうに、いろいろ新しい文化をうけ入れましたので、生活は目を追うて進み、人人の心はしだいに高められて行きました。

佛教 半島の國國の中では、任那のほかに百濟がわ

が國と最もしたしくしてゐました。支那の文化も百濟を通して多くのことが多かつたのですが、ことに大せつなのは佛教をつたへたことであります。佛教はインドの釋迦が説いた教へで、支那にひろまり、半島につたはり、さらに百濟からわが國に渡つてきたのです。それは今からおよそ千四百年ほど前のことであります。

問題

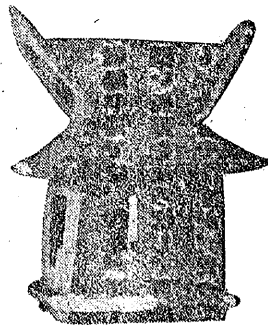
一 大昔の人人はどんなくらしをしてゐたでせうか。またそれは何によつて知ることができますか。



石をの



土器



埴輪の家

二 貝塚とはどんなものですか。近くに貝塚があつたらしらべてみませう。

三 九州の北部や大和の地方が、とくに早くから開けたわけを考へてみませう。

四 古墳とはどんなものですか。古墳からほり出される物について、そのころの人人の生活を考へてみませう。

五 大陸の文化はどうしてつたはることになつたのですか。また大陸からはどんな文化がつたはり、わが國ではそれをどんなふうにとり入れたかをしらべてみませう。

第二 開け行く日本

一 聖德太子

わが國は大陸の文化をとり入れながら、だんだん開けて行きましたが、聖德太子のころから、にはかに進んできました。

冠位と憲法 聖德太子は、推古天皇が位におつきになつたとき、皇太子におたちになり、同時に攝政として、政治をおとりになることになりました。それは今から、およそ千三百五十年ばかり前のことであります。

太子は、攝政の間にいろいろな仕事をなさいましたが、その第一は政治をたてなほすことであります。そのころ朝廷に仕へる氏の中でも、蘇我氏のやうに勢力のあるものが、土地と人民をたくさん持つて、力をふひとりぎめにせず、大勢の人と相談した上でやらなければならぬことなど、政治をする上の心得が、こまごまと示されてゐます。

隋との交はり そのころ、大陸では隋が久しくみだれてゐた支那を一つにまとめ、大そう榮えてゐました。太子はこれと國の交はりを開いて、その進んだ文化をとり入れ、わが國をもつとよい國にしようとお考へになり、小野妹子らを隋におつかはしになりました。その時の手紙の書き出しには「東の方の天子が、この手紙を西の方の天子にさしあげます。」と、しるされてゐました。それまでは、わが國から、支那にみつぎものを、持つて行くといふことになつてゐましたが、この時から、對等のつきあひが開かれたのであります。

太子はそののちも、使ひのものと一しよに留學生や僧をお送りになり、支那の制度や學問について勉強をおさせになりました。この人人が、のちに大化の政新

るつてゐました。また朝鮮半島では、新羅が強くなつて、わが國となじみの深い任那をほろぼし、百濟を攻めるなど、國の内も外も、大分やうすが、變つてきました。太子は、これらのやうすをあらんになつて、まづ家からで役目をうけつぐ昔からのならはしを、改めたいとお考へになり、はたらきのある人を重く用ひるために冠位をお定めになりました。つぎに十七條の憲法をつくつて、役人たちをおさとしになりました。そのはじめに「和」の大せつなことをお説きになつてゐます。これは朝廷に仕へる人人が、仲よく力をあはせなければならぬことを示されたのです。また勢力のある人人が、人民から勝手に税をとりたててはならないこと、人民のうつたへをよく聞いて、えこひいきのない政治をしなければならぬこと、大せつなことはをなしとげる上に、大きなはたらきをすることになるのです。

法隆寺 太子は、またあつく佛教をたつとばれ、これを國內にひろめるために、力をおつくしになりました。ご自分で佛教の書物までもお書きになりましたし、たくさんの方の寺をお建てになつたりしました。そのために學問や美術も大そう進歩しました。

今、奈良の西南斑鳩の里に、なだらかな山をうしろにして立つてゐる法隆寺は、太子がおすまひの宮殿のかたはらにお建てになつた寺であります。ふつくらした丸柱の中門、どつしりかまへた金堂、大空にそびえる五重塔が、白い砂の上に、とりどりの形を見せてゐます。これらの堂塔は、今のこつてゐる木造の建物としては、世界で一ばん古いものであります。金堂の中には太子がおつくらせになつた佛像などのほか、力のかもつた線と美しい色でゑがいた壁画など、古い美術品がたくさんのかつてゐます。

二 大化の改新

大陸のやうす かうしてゐる間に、支那では隋がほろびて唐がおこり、一そう盛んな國となりました。わが國では、ひきつづき遣唐使を送つて、唐と國の交はりをつづけてゐましたので、そのやうすはすぐにつたへられました。これを見聞きした人人の間には、わが國も、唐の政治のしくみなどを見ならつて、國の中をととのへなければならぬといふ考へがおこつてきました。これを實行しようといふはたてられたのが、中大兄皇子です。

皇子は、中臣鎌足らとご相談の上、そのころ大きな勢ひをふるつてゐた、蘇我氏のかしらをほろぼし、新しい政治を行はれることになつたのであります。

改新の政治 まづ孝徳天皇が、位におつきになりました。中大兄皇子が皇太子となられ、鎌足や、支那に勉強に行つて、歸つてきた人人などを、重くお用ひに

たつて、古いならはしを、とりのぞき、新しい政治をおはじめになりました。時に西暦六百四十五年でありました。この時、はじめて、大化といふ年号を定められましたので、この新しい政治を、大化の改新といひます。

改新の政治で定められた一ばん大せつなきまりは、土地と人民をすべて公の土地、公の人民とし、班田の法といつて、人はみな六歳になると、國家から男女それぞれきまつたひろさの田地を分けてもらひ、一生の間これをたがやすしくみであります。人民は、これからは勢ひの強い氏に仕へるのではなく、誰もが公民としてはたらくことになりました。

大寶律令 つぎの齊明天皇の代にも、中大兄皇子がひきつづき、皇太子として政治をおたすけになりました。阿倍比羅夫が秋田・津輕の方面まで、出かけて、蝦夷をしづめたのは、このころのことです。朝鮮半島では、新羅の勢ひが、ますます強く、唐と力をあはせ

て、百濟をはるばしましたので、百濟は、わが國にたすけを求めてきました。わが國は、兵を出して、百濟をもう一度もりたてようとしたが、唐の勢ひが強くて、うまく行きませんでした。この間に、中大兄皇子が位におつきになりました。これを、天智天皇と申します。

天皇は朝鮮のことよりも、政治のたてなほしをなしとげることの方が、もつと大せつである、とお考へになり、兵をお引きあげになりました。ここでわが國は、朝鮮半島からすつかり手を引くことになつたのです。天皇の代に新しい政治のし方を、こまかく定めたおきてがつくられましたが、そののちいくたびも改められ、文武天皇の大寶元年（西暦七〇一年）に大寶律令となつてでき上りました。大化の改新がはじまつて

から六十年ほどのこととあります。この規則によりますと、朝廷には太政大臣・左大臣・右大臣をはじめ、たくさん役ができて、政治をうけもち、國には

國司がおかれました。九州は外國とのつきあひの上で、大せつなところでしたから、とくに大宰府がまうけられました。また都に大學、國ごとに國學をおき、役人は、これらの學校で勉強した上、試験に及第したものからとることに定められました。

土地の分け方についても、さらにこまかい規則ができました。しかし班田の法ができて、身分の高い人には特別にひろい土地があたへられました。その上、人の数がふえて、分ける土地が足りなくなつて行つたので、奈良時代になつてから、新しく田地を開くやうにしむけるため、田地を開いた人は、その土地を自分のものにしてよいことにしました。そのために、土地を公のものにしておくたてまへは、あまり長つづきしなかつたのであります。

三 奈良の都

新しい都 新しい制度ができて、朝廷の政治が日本

中にひろく行きたることになったので、それにふさはしいつばな都をつくらうといふことになりました。そこで天智天皇は近江の大津に、持統天皇は大和の藤原に都をおたてになりましたが、どちらも長くつづきませんでした。やがて、元明天皇の和銅三年（西暦七一〇年）今の奈良市の西部に大きな都がいられた。今からおよそ千二百三十年あまり前のことです。

それから七代七十年あまりの間、ここがわが國の都となりました。これまでは大てい天皇のおかばりになるたびに、おすまひになる宮の場所も変わりましたが、その場所がにぎやかな町となつたのもありませんでしたが、これでわが國にも、唐の都の長安とくらべられるやうな都ができたわけです。

はばの廣い道路が、ごばんの目のやうに、きちんと町をくぎり、朝廷のある大内裏や、寺の白い壁、赤い柱の大陸風の建物、あちこちに立つてゐます。物

歌が有名です。

國分寺と大佛 奈良の都が最も榮えたのは、聖武天皇の天平の代であります。天皇は、佛教を深くうやまはれ、これをひろめるために、國ごとに、國分寺をお建てになりました。國分寺は、國司の役所の國府とともに、その地方の中心となり、都の文化を、地方につたへる役目をしました。

今でも「國分寺」とか「國分」とかいふ名が、土地にのこり、國分寺の堂や塔の大きな台石が、田や畠の間に見出されたり、その屋根をかざつてゐた布目瓦が、ちらばつてゐたりします。

天皇は、さらに都に、東大寺の大佛をおつくりになりました。大佛の高さが、およそ五丈三尺（およそ十六メートル）、大佛殿の高さが十五丈あまり（およそ四十五メートル）といふ大がかりのものです。かうして佛教が大そう盛んになりますと、それにつれて、美術品をつくるわざも、目だつて上手になりました。今、

を賣り買ふ市も、開かれました。この賣り買ひを、便利にするため、新しく銅で、おかねのつくられたのも、世の中の進歩を示してゐます。それまでは、布や糸や稻などが、おかねの役目をしてゐたのです。奈良に都ができるすこし前に、武藏の國から、銅がとれるやうになり、それでおかねをつくつたのであります。

記紀と萬葉集 この時代になつて、いろいろな書物が書きしるされるやうになりました。まづ元明天皇の代に古事記が、元正天皇の代に日本書紀ができ上りました。どちらも古くからつたはつた神話や物語などを書きとめた本です。

つぎには、おもに奈良時代の和歌を集めた萬葉集ができました。和歌は昔から日本にあつた文學ですが、これは今のこつてゐる和歌の本では一ばん古いものです。天皇をはじめ一ばんの人民にいたるまでの歌が、四千五百ほど集められてゐます。中でも柿本人麿の

東大寺の中にのこつてゐる正倉院や、三月堂などの建物、そこをさめられた数種の宝物や佛像を見ると、そのころの文化がどんなに進んでゐたかが、よくわかります。

和氣清麻呂 しかし都の文化がこんなに榮えても、それをたのしんだのは、朝廷に關係のある身分の高い人ばかりでした。貧しい人民や地方の人人は、低いくらしをつづけてゐました。

また佛教が朝廷からあまりにたつとばれたため、國の費用がかさんだばかりでなく、僧の中には、政治に口を出すものさへあらはれました。中でも道鏡は稱徳天皇に重く用ひられ、高い役につき、ついに天皇にならうとするのぞみをおこしましたが、和氣清麻呂が強く反對して、このくはだてをさまたげました。つぎに光仁天皇がお立ちになり、佛教を大事にしすぎたのを改めるなど、いろいろ政治をたてなはされたのであります。

四 外國との交はり

遣唐使 百濟のことで、一時あらそつた、わが國と唐とは、またちに仲よくなりました。もとのやうにわが國から、唐へ遣唐使が行き、唐からも使ひがきました。

新羅とも前通りつきあひが行はれました。遣唐使の一行は留學生を加へて、五百人をこえることもありました。これらは四せきの船に分れて乗り、難波（今の大阪）の港を出て、筑前の博多により、東支那海を横ぎつて大陸へ向かひます。そのころの船で外海の荒波を乗りきるのば、容易なことではなく、たびたび吹き流されたり、くつがへされたり、まづ多くの命がけの航海でした。

それでも唐のすぐれた文化をとり入れようとする熱心さから、この危険を乗りこえて、そのつとめをはたしたのであります。

からも、使ひを送つて、したしみをかさねたのであります。

外國人の渡來 このやうに奈良時代には、東西の交通が大いに開け、海外の國國との交はりには、これまでにないほど、にぎやかなものになりました。鑑真といふ唐のえらい僧が、教へをつたへるためにわが國に渡らうとして、いくたびかなんぎにあひ、めくらとなつても、なほ最初の志をまげないで、とうとう、そののぞみをとげたこともありました。インド人やペルシャ人が、はるばると海山を越えて、わが國に渡つてきたこともありました。

また唐へ留學して學問をへ、歸りに船が吹き流されて、國に帰ることができず、そのまま唐の朝廷に仕へて高い位に上り、一生を終つた阿倍仲麻呂のやうな人もあります。

聖武天皇の代は、唐の最もはなやかな時でありました。西は中央アジア、南はインド支那半島までも勢ひをひろめ、まはりの各地でおこつた學問や宗教や美術や工藝などをつたへて、支那の文化は大さう進んでました。

しかも、その西の方のアラビヤも、強い國となつてゐたため、たがひのゆききも行はれ、遠く、アラビヤやペルシャで榮えてゐた文化も、唐に流れこみました。

そこで唐としたしく交はつてゐたわが國にも、こんなに遠い西の方の文化がつたはり、天平の美術工藝は、さらに一そうの色どりを増しました。

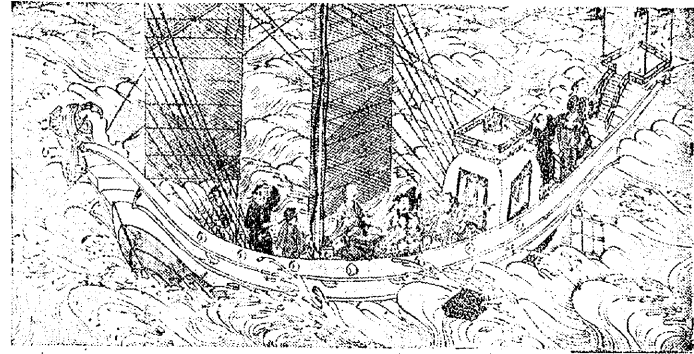
渤海との交はり 元明天皇の代に、滿洲地方に渤海といふ新しい國がおこりましたが、この國からも聖武天皇の代に、使ひがきて、毛皮などの産物を持つてきました。渤海はそののち、國がほろびるまで、およそ二百年の間、たびたび使ひを送つてきました。わが國

問題

一 聖德太子のなさつた仕事についてまとめてみませう。

二 大化の改新とはどんなことですか。また改新の政治で大せつなことをあげなさい。

三 國分寺とはどんな寺で、どんな役目をしましたか。近くに國分寺のあとがあつたら、その場所、かまへの大きさ、白石、布目瓦などをしらべてみませう。



遣唐使の船



法隆寺

第三 平安京の時代

一 平安の都

都うつり 光仁天皇のつぎに、桓武天皇が位におつ
きになりました。奈良の朝廷の政治を、すっかりたて
なほすためには、どうしても、都をうつして人人の氣
持を新しくしなければならぬと、考へられるやうに
なりました。そこで桓武天皇は和氣清麻呂のかんがへ
をお用ひになつて、延暦十三年(西暦七九四年)に、山
城の京都の地に、都をおうつしになりました。新しい
都は、三方になだらかな山をひかへ、清い水が流れ
て、けしきのよい土地でありました。その上、東西の
國國とのゆききも便利でありますし、淀川によつて、
難波の港に出るにもつがふのよい場所をしめてゐまし
た。四方から集つてきた人人は、この新しい都を平安京

といひました。それからのち、明治天皇が東京におう
つりになるまで、およそ千年の間、代代の天皇はこ
こにおいでになりました。ことに、鎌倉に幕府が開かれ
るまでの四百年ばかりは、平安京が、政治の上でも、
文化の上でも、わが國の中心になつてゐたのでありま
す。

蝦夷の同化 都うつりにもなつて、國の中では、
いろいろ新しいころみが始まりました。政治につ
いても改められたところが少くありません。ことに地
方の政治をよくすることに、力がそがれました。東
北地方は、孝徳天皇の代に今の新潟あたりまで開け、
聖武天皇のころ、今の仙臺あたりまで開けたのであり
ますが、その北の方の蝦夷はまたよくなつかずに、た
びたびさわぎをひきおこしました。そこで桓武天皇の

代に坂上田村麻呂が征夷大將軍としてしづめに向かひ今の岩手縣あたりまで進みました。朝廷では、蝦夷に田地をあたへ、農業や養蚕の、やりかたを教へたり、また蝦夷を地方の役人にとりたてたりしました。また東國の人人で、東北の地にうつり住み、土地を開いて、蝦夷をみちびくものも少くありませんでした。かうして蝦夷は、國民と一つになつて行き、やがて東北も、他の地方とすこしも変らないやうになつたのであります。

最澄と空海 佛教も新しい時代にふさはしいものがおこりました。最澄の天台宗と、空海の眞言宗とがそれであります。二人は、桓武天皇の代に唐に渡り、それぞれ唐の名高い僧について勉強し、新しい佛教を學んで歸り、これをひろめたのであります。奈良時代には、都の中にたくさん寺ができた、そのために、僧が、政治に口を出したりしましたので、最澄は近江の比叡山に延暦寺を建て、空海は、紀伊の高野山に金剛

峯寺を建て、弟子たちに、山にはいつて一心に勉強することをすすめました。しかし二人とも、山の中にこもつて、世の中のことをなほざりにしたのではありません。空海は、國國をめぐる歩いて、田地を開くために池をつくつたりしました。讃岐の國につくつた萬農池は、今でもその地の農業に役立つてゐます。のちに、最澄は傳教大師、空海は弘法大師の名をおくられました。

二 藤原氏の榮え

攝政と關白 大化の改新に、大きな手がらのあつた中臣鎌足が、病氣でなくなる前に、天智天皇は、鎌足に藤原といふ家の名をおさづけになりました。その子孫の藤原氏は、先祖の鎌足の手がらなどによつて、だんだん勢ひを得てきましたが、平安京の時代にはいつてから、ことに目だつて盛んになりました。このころになると、律令で定められた政治のやりかたも、時勢

三 はなやかな文化

人々が、代代重い役目につくならはしにかへつてしまひました。律令の規則にない新しい役もいろいろおかれたのであります。その中で最も高い攝政・關白は、藤原氏がひとりでしめることになりました。攝政・關白は、朝廷の政治をすべてきりもりする重い役目でありましたから、政治はこれから藤原氏の思ひ通りになつたのであります。

道長父子 宇多天皇は藤原氏のはかに、家からは低いながらも學問にすぐれた菅原道眞をお用ひになり、つぎの醍醐天皇も、道眞を右大臣にして政治をおとらせになりました。しかし藤原氏は、よその氏の人が勢ひを得るのをきらつて、道眞を大宰府にうつしてしまひました。

かうして藤原氏の勢ひは、ますます盛んになりましたが、ことに道長と、その子頼通のころが、藤原氏の一ばんはなやかな時でありました。

文化のうつり行き 藤原氏をはじめ都の貴族たちが榮えて、はでなぐらしをするやうになりましたので、これにつれて、はなやかな文化が生まれました。また、道眞の意見により、遣唐使がとりやめられたのも、まもなく、唐がほろび、渤海も、新羅も、つづいてほろびましたので、わが國と、大陸の國國との、公の交はり、ひとまづ絶えました。そのためもありませう、今まで、支那の文化をとり入れることにいそがしかつた、わが國の文化も、しぜんと變つてきたのであります。

大和繪とかな 貴族たちのやしきは、寢殿造といふ建て方になりました。今の日本画のおこりである大和繪も、このころからはじまつてゐます。寢殿造のやしきにたてる、ふすまやびやうぶには、日本のけしきや四季のながめなどが、色とりどりの大和繪でえがかれ

ました。

かなが、ひろく使はれるやうになつたのは、とりわけ大せつなことであります。不自由ながら、漢字で用をまかせてきた國民は、いつのまにか便利かなをこしらへて、これで國語を書きあらはすことをおぼえしました。かなを用ひると、ふだん使つてゐることばが、そのまま書きあらはせますし、こまかな考へや感じも、思つた通りにのべることができます。まづこれを用ひた和歌が盛んになり、古今集をはじめ、和歌の本がつぎつぎにつくられました。また物語もつくられるやうになりました。竹の中から生まれて、月の都へ歸つた、かぐや姫の話を書いた竹取物語のやうなものがまづでき、のちには、そのころの世の中のありさまを、こまかにうつしたものがつくられ、つひに紫式部のつくつた、源氏物語のやうにすぐれたものがあらはれたのであります。紫式部のはかにも、枕草子を書いた清少納言など、文章の上手な女性が少くありません。

都と地方

貴族の文化が、このやうに榮えてゐたころ、地方はどんなありさまだつたでせうか。貴族たちは、都で花やもみをながめたり、歌や音楽をたのしんだりして、はなやかなくらしをしてゐたので、美しい藝術などが榮えましたけれども、政治に熱心でなかつたため、世の中は、だんだんさわがしくなつてきました。地方の役人の中には、自分の利益になることだけを考へてゐるものが多く、地方の政治が行きとどかないので、それにつけこんでわるものがはびこり、人民のくらしをおびやかしました。都には市や店が開かれ、物賣りの女が歩くなど、あきなひがはんじやうし、淀川べりには淀・山崎・江口などの船つきばがあつて、にぎやかでしたが、ゐなかのさびしい道すちには追ひはぎが出て、たび人をおそつたり、瀬戸内海では海賊がゆききの船の、つみ荷をうばつたりしました。そればかりではなく都の中にさへ、ぬすびとが出たり、火つけがおこなはれたりするといふありさまとな

んでした。私たちの祖先のこした文化の中には、このやうに女性の手でつくられたものもいろいろあるのです。

鳳凰堂

佛教も、藤原氏をはじめ、貴族の生活のうちにとり入れられて、めづらしいものではなくなりました。寺の建物や佛像・佛画も、みな日本風の、したしみやすいものになりました。道長は、京都に法成寺を建て、頼通は宇治に平等院をつくり、年とつてのち、その寺の中であつたのであります。法成寺はあとかたもなくなくなりましたが、平等院のおもな建物である鳳凰堂は今でものこつてゐて、そのころの藤原氏の榮えをしのばせてゐます。左右に廊下がのびてゐて、ちやうど鳳凰といふきれいな鳥が、つばさをひろげて、空をとんでゐるやうな形をしてゐるところから、鳳凰堂と呼ばれてゐるのです。

四 地方のありさま

つたのです。

莊園 班田の法もほとんどおこなはれなくなつて勢ひのあるものが、莊園といふ領地をたくさん持つやうになりました。藤原氏の勢ひがあつたやうに盛んであつたのも、一つにはそのひろい莊園から、多くの税がはいつてきたからでありました。朝廷では、莊園をすこしでもへらさうと、いろいろ苦心をしたのですが、貴族の勢ひが強いで、ききめがありませんでした。しかし、さうしてゐる間に、この莊園の中から新しい力を持つたものが、だんだん頭をもたげできます。それは武士でありました。

五 武士のおこり

武士 地方がさわがしくなると、農村の人人は、日ごろ田や畠をたがやすかたはら、武器をそなへ、たがひに力をあはせて、自分らを守らなければ安心できません。この場合、その中心となつて、農民をさしづした

のが、莊園に住む有力な地主たちでした。やがて、これらの人人は、いつのまにか、農業よりも弓矢をとるのが、おもな役目になりました。これが武士のおこりでありまふ。

東國と源氏　東國は、まだあまり開けてゐなかつた上に、京都から遠くはなれてゐるので、都のはでな風ふうにそまることが少く、しぜんに、しつかりした氣風が

都にも、勢ひをのばしてくるようになりました。

やしなはれ、早くから、武士の團結ができてゐました。

は「平家でないものは人でない。」といふものさへ出たはどです。清盛は、そのあひだに、兵庫に港をきづき、唐のあとにおこつた宋と、貿易をこころみたり、瀬戸内海の音戸の瀬戸をきりひらいて、船が通れるやうにしたり、世の中のためになる仕事をしました。しかし勢ひにまかせたふるまひが多かつたので、あちこちからうらまれて、長く榮えることができませんでした。

問題

- 一 なぜ今の京都の地が都にえらばれたのですか。
- 二 この時代に日本風の建物や繪や、またかな文字などの、できるやうになつたのはなぜでせう。
- 三 かな文字ができたのは文化の發達にどんなに役立ちましたか、またかな文で書かれた本にはどんなものができましたか。
- 四 地方に武士がおこつてきたのはなぜですか。
- 五 東國で源氏の勢ひが盛んになつたのはなぜですか。
- 六 平氏が榮え、またまもなくはろびたのはなぜですか。



京都の店

第四 武家政治

一 鎌倉幕府

幕府のなりたち 源平のあらそひが、源氏のからいくさに終つたので、政治の権力は、しぜん、源頼朝の手にうつることになりました。これまで公家がつてゐた政治を、武士がとることになつたわけです。そこで、武士の手で新しい政治をおこなふためには、いろいろな役所が必要になつてきます。まづ部下の取りしまりをする侍所ができました。それから政治のことを取りあつかふ政所ができました。またうつたへを聞いた、そのさばきをする問注所ができました。侍所の仕事は、部下の武士でも十分まにあひますが、政治や裁判などのことは、これまでそんな仕事をしたことのない部下にまかせるのは、心配であります。そこで

頼朝は、今までその仕事をしつめた人を京都から招いて、これにあたらせることにしました。

このころ頼朝の命令は、二部の地方にしか行きとどきませんでした。それで全國に自分の力を行きとどかせるには、どうしても地方を治めるしくみをつくらなければなりません。平氏はほろびましたが、世の中はまだすっかり平和になつたわけではありません。その上、平氏をほろぼすのに手がらをたてた弟の義經が、兄のうたがひをうけて行くへをくらし、そのぬどころさへわからないありさまです。頼朝は、これをよい事にして、義經をさがし、世のむだれを防ぐためといつて、全國に守護と地頭をおくことを、朝廷に願ひ出しました。守護は國ごととて、警察の仕事をし、地頭は地方の莊園にゐて、税をとり立てる役目でありま

ず。朝廷の許しをうけた頼朝は、それぞれ自分の部下を、守護や地頭にしました。このやうにして、頼朝は、政治の実権をすつかりに握ることになりました。まもなく、建久三年（西暦一一九二年）に、頼朝は、征夷大將軍に任せられました。ここに新しい政治のしくみができ上りました。これが武家政治であります。征夷大將軍が政治をとる役所を幕府といひますが、その幕府のおかれた鎌倉の名をつけて、鎌倉幕府といひます。武家政治は、こののち、いくたびか浮き沈みはありましたが、明治維新まで、七百年ばかりつづきました。

執権政治 頼朝は、弟たちを殺してしまつたので、源氏は、三代二十八年ではろびてしまひました。頼朝が死んだのちは、妻の政子とその一族北條氏が、幕府の実権をにぎりました。政子の父北條時政は、頼朝が兵をあげてから、やつと変らず頼朝をたすけ、のちに政所の仕事をし、執権といひ、幕府のうちで一番ん

重んぜられてゐました。その子義時もちまた執権となり、さらに侍所の仕事をするやうになりましたので、幕府の実権は、すつかり北條氏の手につつてしまひました。源氏がはろびたのち、源氏の血すちを引いてゐる幼い將軍が、京都から迎へられました。しかし將軍といふのは名ばかりで、幕府の政治は執権北條氏の思ひ通りになつたわけです。これを執権政治といひます。執権政治は、こののち鎌倉幕府がはろびるまでつづきます。

貞永式目 時政の子義時から、執権には、つづきにつづきな人が出て、よい政治をおこなひました。義時の子泰時は、そのうちで最もすぐれた人です。評定衆をおき、これと相談した上で政治をし、つねに政治が公平になるやうに心がけたので、人人は心から泰時にしたがひました。泰時が定めた貞永式目は、幕府の政治や裁判などのことをきめたおきてで、五十一條からできてゐます。かんたんながら、

実際に役に立つやうにできてゐましたので、こののち長く武家のおきての根本になりました。

泰時の孫時頼も、すぐれた執権の一人であります。時頼は、母松下禪尼の教へをよく守り、質素な暮らしをして、部下の根本になりました。そして貞永式目をもとにして、よい政治をおこなひました。執権をやめてからも、幕府の政治が、正しくおこなはれてゐるかどうかを見るために、國國をまはり歩きました。

蒙古の來襲 時頼の子時宗が執権の時、蒙古の來襲がありました。大陸では、五十年ほど前に、蒙古に成吉思汗が出て四方をしたがへ、その孫忽必烈の時には、朝鮮半島にまで力をのびてきました。そしてまもなく國の名を元と改めました。

忽必烈は、勢ひにまかせて、わが國までもしたがへようとし、たびたび使ひや手紙を送つてきました。わが國では、その手紙が無禮なので返事をしませんでした。すると忽必烈は、文永十一年（西暦一二七四年）

十月、九百せきあまりの船に、およそ四万の兵を乗せて、博多灣に攻めこませました。武士たちは、勇ましく戦ひましたが、敵が上陸してきたため、大それたんぎをしました。ところが、大風がおこつて、敵の船をくつがへしたので、これを退けることができました。

忽必烈は、それでもわが國をしたがへることを思ひきりません。こののち、弘安四年（西暦一二八一年）七月には、四千四百せきの船に、十四万の大兵を乗せて、ふたたび博多灣に攻めよせました。この時もまた大あらしがおこつて、敵の船を吹きさらしてしまひました。

二 社會と文化

武士の生活 政治の実権は、公家の手からはなれてしまひましたが、公家は京都で、昔とあまり変わらない生活をしてゐました。しかし國民の中心となつて、世

の中をみちびいて行つたのは、武士であります。武士といつても、鎌倉にゐるものばかりではありません。大ていのは地方に住んでゐたのです。

もともと武士は地方の莊園にゐた小さな地主であります。自分で田や畠をたがやして、農業をしてゐたものも少くはありませんでした。地方の武士の日計のくらしは、質素な農民のくらしとあまり変らないものであります。これで武士のくらしが質素を重んじたわけがわかります。

武士のすまひは、板ぶきや草ぶきで、まはりに土手や垣をめぐらしたり、堀をはつたりしたものであります。このやうなすまひの建て方を武家造といつて、公家の寝殿造にくらべると、すつとかんたんなものであります。

商業の発達 地方には、國民のうちで一ばん数の多い農民が武士と一しよに住んで、農業にはげんでゐました。この武士や農民が、生活に必要な品物を取りか

人や僧の往來は盛んにおこなはれて、大陸の文物が持ちこまれました。唐のあとにおこつた宋との間にも、この關係がつづきます。禪宗には榮西の臨濟宗、その弟子道元の曹洞宗があります。また宋や元から多くの名僧が、遠く海を渡つてきました。禪宗はおもに武士の間に信ぜられてゐました。

學問と藝術 學問は、おもに公家や僧の間でおこなはれてゐましたが、あまり盛んであつたとはいへません。武士の中にも學問をこのむ人が出ました。北條實時・顯時父子が、武藏の金澤の稱名寺に金澤文庫をおこして、たくさんのお書を集めたのが、今のこつてあります。大學・國學の制度は、もうすたれてしまつて、寺の中で、新しい教育が、おこなはれるやうになりました。

文學では、昔からわが國ぶりをつたへた和歌がなほ盛んで、公家と僧が中心でありました。藤原定家は、このころ第一の和歌の名人であります。定家らが、後

へなために、日をきめて市が立ちました。京都や鎌倉のやうな都市では、物を買ふ店が集つて市町となり、人人は、いつでもほしい物を買ふことができました。かうして商業が発達してきたので、爲替や問屋などがおこり、遠い土地との間でも、自由に取引ができ、るやうになりました。

新しい佛教 これまでの天台宗や眞言宗は、おもに貴族の間に信ぜられて、武士や農民などとはあまり關係がありませんでした。ところがこの時代になると、武士や農民の心によく合ふ新しい佛教の宗派が、つぎにおこりました。法然の開いた浄土宗、その弟子親鸞のはじめた眞宗(一向宗)、一蓮のおこした時宗、日蓮のとなへた法華宗(日蓮宗)などです。これらの宗派は、どれもみなわかりやすく、入りやすいので、武士や農民の間に、ひろく信ぜられました。また宋から禪宗がつたはりました。遣唐使が廃止されてから、支那との公の交はりには、すつと絶えてゐましたが、商

鳥羽上皇のおほせをうけて、新古今集をつくりました。これはこののち長く和歌をよむものの手本になりました。公家や僧ばかりでなく、武士の中にも、りつばな和歌をよんだ人が少くありませんでした。とくに源氏の將軍實朝の和歌がすぐれてゐました。

かなまじりの力強い文章で、武家の榮えたりおとろへたりしたありさまをつづつた物語が、たくさん書かれました。これを軍記物といひます。中でも平家物語が有名であります。これは琵琶にあはせて語られ、すつとのちの世まで喜ばれました。

建築や彫刻にも、國民生活をうつしたものが見られます。建築では、禪宗の寺院に、宋の建て方がつたり、それに日本風が加へられました。彫刻では運慶・湛慶らの名人が出ました。今も東大寺にのこつてゐる仁王像は、運慶がつくつた作品の一つであります。

繪画では、大和繪が盛んで、物語や、社寺のいはれなどをかいた繪巻物が流行しました。繪巻物は、繪と

文章をかはるがはるかいだ長い祭物であります。今に
すやれたものがたくさんのごつてゐます。

王義では、武器をつくることが盛んでありましたが、
よろひ・かぶとや刀などは大へんりっぱなものができ
ました。刀では岡崎正宗が名人でありました。

問題

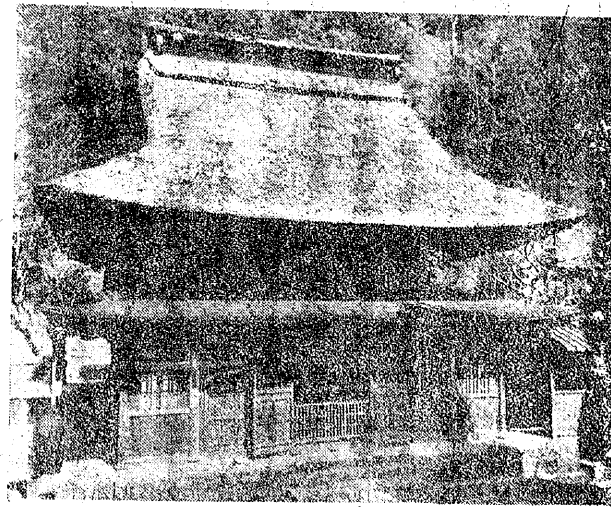
一 武家政治はどうしてはじまりましたか。これまで學んだと
ころをふりかへつて背へてごらん下さい。

二 源頼朝はどうして守護と地頭をおいたのですか。守護と地
頭の役目はどんなことでしたか。

三 武士はどういふ生活をしてゐましたか。またどんな家に住
んでゐましたか。

四 どうして新しい佛敎がおこつたのでせうか。

五 繪巻物とはどういふものですか。



寺の宗禪

第五 鎌倉から室町へ

一 建武のまつりごと

朝廷と幕府 政治の実権は、武家政治の時代になつ
て、朝廷からはなれました。後鳥羽上皇は、政治の実
権を、武家からとりかへさうとお考へになりました。

源氏がはるびたあとで、上皇は、執権義時をうつて幕
府を倒すばかりごとをお立てになりましたが、失敗し
てしまいました。これを承久の変といひます。

後醍醐天皇のあとに、後深草天皇、龜山天皇と、御
兄弟が、つぎつぎに位におつきになりました。幕府
は、このお二方の子孫が、かはるがはる位におつきに
なるやうに定めました。幕府を倒すばかりごとが二度
とおこないやうにするつもりだつたのです。

幕府のおとろへ 蒙古の來襲を防ぐために、幕府は

その力を大かたつかつてしまひました。それで、手が
らを立てた部下の武士に、十分賃をあたへることがで
きません。その上、武士もこのいくさでたくさんの方
用をつかつたので、その生活は目に見えて苦しくなり
ました。幕府は、力とたのむ部下がこまつても、それ
を救つてやる力がなくなつてゐました。

その上に、執権高時は、いろいろな遊びがすきで、
せいたくなことばかりして、すこしも政治に心をいれ
ようとしませんでしたので、人人の心は、だんだん幕
府からはなれて行きました。

このやうな時に、後醍醐天皇が位におつきになりま
した。天皇は、高時をうつて、幕府を倒すばかりごと
をお立てになりましたが、はかりごとがもれて失敗し
ました。けれども天皇のご決心は変わりません、まもな

く第二回のはかりごとをお立てになりました。このたびも、用意がでないうちに、鎌倉に知れてしまひました。そこで、天皇は、笠置山にこもつて、國國の武士をお召しになりました。高時は、大軍をさしむけて、笠置山をおとしいれ、天皇を隠岐の島におうつししました。これを元弘の変といひます。

河内の楠木正成は、お召しをうけると、すぐに兵をあげて、幕府の大軍を大いになやました。それを聞いた國國の武士は、一度に立ち上りました。天皇は、このやうすをお聞きになり、こつそり隠岐を出て、伯耆の國においでになりました。

高時は、おどろいて、足利高氏を伯耆に向かはせましたが、高氏は、途中で幕府にそむき、京都にゐる北條氏の一族を攻めほろぼしました。関東でも、新田義貞が兵をあげて、鎌倉に攻め入つたので、高時は一族と一しよに自殺し、北條氏も鎌倉幕府も、ともにほろびてしまひました。時に元弘三年(西暦一三三三年)

武家の仲は、だんだんはなれて行きます。武家のうちには、武家政治の方がよかつたと思ふものさへ出てきました。建武の中興は、この公家と武家の仲たがひから失敗することになりました。

京都と吉野 高氏は、天皇の御名尊治の一字をいただいて尊氏といひ、武士のうちで一ばん勢ひがありました。自分が源氏の一族なので、ふたたび源氏の幕府をおこさうとする野心を持つてゐました。その時に、関東で北條氏の一族がそむきました。尊氏はこれをうつて、征夷大將軍になることを願ひましたが、お許しがありません。そこで勝手に鎌倉に下つてそむきました。まもなく京都に攻めのぼりましたが、さんざんにまけて、九州へにげました。九州でなくさんの武士をしたがへた尊氏は、大兵を海と陸の二手に分けて攻めのぼりました。途中、湊川で正成をやぶり、勝ちに乗つて京都に攻め入りました。

そして、後深草天皇の子孫である光明天皇を立

で、頼朝が幕府を開いてからおよそ百四十年でありました。

建武の新政 天皇は、まもなく京都におかへりになつて、新しい政治のしくみをおつくりになり、記録所でしたしく政治をおとりになりました。裁判をする雑訴決斷所や、京都をまもる武者所をおき、國司と守護とで、地方の國國を治めさせました。あくる年の正月に、年号が建武と改まつたので、これを建武の中興といひます。

天皇は、皇子護良親王を征夷大將軍とし、手がらにあつた公家や武士を、それぞれ重い役におつけになりました。けれども、長い間政治からはなれてゐた公家では、政治はうまくはかどりません。その上に、幕府が倒れたので、公家は武家をあなどりしました。武家は、このたびのことは、自分たちが命がけで戦つたから成功したのだと思つてゐるのに、公家が重んぜられるのを見ると、不平でたまりません。かうして公家と

で、皇位のしるしをお渡し下さるやうに後醍醐天皇に願ひました。天皇は、いせのしるしを光明天皇に渡し、こつそり京都を出て吉野におうつりになり、こゝで政治をなさいました。時に建元元年(西暦一三三六年)でありました。このうち四代五十七年の間、吉野が皇居になりました。一方京都には、光明天皇がおいでになりました。これからは、公家も武家も、思ひ思ひに、兩方の朝廷に仕へて、たがひに争ひをつづけることになりました。

このうち尊氏の孫義満は、吉野の後醍醐天皇に、京都におかへりになることを願ひました。天皇は、この願ひをお聞き入れになつて、京都の後小松天皇に、位をおゆづりになりました。これで、朝廷は一つになつて、長い間の争ひはしづまり、また平和な時代になりました。

幕府の成り立ち 尊氏は、延元三年（西暦一三三八
年）光明天皇の許しをうけて、征夷大將軍になりました。
そして鎌倉幕府を根本にして幕府をつくりまし
た。こののち義満の時になつて、足利氏の勢ひが強
なつたので、幕府のしくみもでき上りました。義満は
京都の室町のやしき^{やまき}を幕府にしたので、足利氏の幕府
を室町幕府といひます。

幕府には、將軍が政治のことを相談する管領といふ
重い役があつて、斯波・細川・畠山の三つの家が、こ
の役につくことになつてゐました。管領の下に、鎌倉
幕府と同じく、政所と問注所と侍所がありました。中
でも侍所が一ばん重い役所でした。幕府は、鎌倉に關
東管領をおきました。關東管領には、足利氏の一族が
なりました。地方の國と莊園には、守護と地頭がゐ
ました。

政治のみだれ 尊氏が朝廷にそむいた時、たくさん
の賞をあたへる約束をして、武士たちをさそひまし
地頭からとり立てようとしてもなかなか幕府のいふこ
とを聞きません。

それで人民から、税をとり立てることにしました。
このころも、國民の中心となつたのは、やはり武士で
した。けれども國民の中で一ばん数の多いのは農民で
す。幕府はその農民から重い税をとり立てることを考
へました。農民がたがやしてゐる田や、住んでゐる家
にまで税をかけることにしたのです。またゆききのは
げしい道路や、船の出入りの多い港に關所をつくつ
て、人馬や荷物や船に税をかけました。それでもまだ
足りないので、京都の金持の商人から重い税をとり立
てました。商人たちは、重い税をさめるかばりに、
幕府の役人とくんで、いろいろよくないことをして利
益をあげることを考へました。これでは人民が一ばん
ひどい目にあふばりです。

そのために苦しんだ人民は、大ぜい力をあはせて一
揆をおこしました。これを土一揆とも徳政一揆ともい

た。それで、將軍になつても、部下をとりしめること
ができません。部下の中には、いくつもの國の守護に
なつて、將軍の命令をきかないものが出ました。これ
が幕府の政治のみだれるものになりました。

その上、義満や義政のやうに、はでなことのすきな
將軍が出たので、幕府の費用はだんだん足りなくなつ
てきました。そんなことにはすこしもかまはず、義満
は、室町にりつばなやしきをつくりました。人人は、
これを花の御所といひました。義満は、京都の北山に
せいたくなべつさうを建てました。かべや柱などに金
ばくをはつたので、これを金閣といひます。義政も、
義満をまねて、東山に銀閣をつくりましたが、途中で
費用がつつなくなりしました。

盛り上る力 將軍がこのやうなせいたくをする費用
は、どこから出たのでせうか。幕府は、全國にたくさ
んの領地を持つてゐました。けれども、そこからとり
立てる税だけでは、たうでいまいにあひません。守護や

ひました。幕府には、もうそれをしづめる力はありま
せん。それで世の中はだんだんさわがしくなりました。

應仁の乱 このやうに幕府の政治のみだれ、世の中
がさわがしくなつて、應仁の乱がおこりました。義政
が、せいたくにふひつて政治に力をいれないのをよい
ことにして、管領の細川勝元と山名宗全が、勝手に勢
ひを争つてゐました。そこへ義政のあとつぎのことで
いざこざがおこり、幕府の中は、勝元方と宗全方の二
つにはつきり分れてしまひました。斯波氏や畠山氏の
間にも、同じやうなことがおこつて、家の中が二つに
分れました。これがもとになつて、京都でいくさがは
じまりました。やがて、戦ひは全國にひろがり、それ
が十一年もの間つづいたのです。京都では、御所も、
公家や武家のやしきも、たくさん社の社や寺などもみな
焼けて、古い宝物もすべて失はれてしまひました。こ
れまで覚えてゐた都は、一めん焼け野原になつてしま
ひました。けれども、この焼けあとから、新しい力が

生まれ出て、つぎの新しい世の中ができて上ってくるの
です。

三 経済と文化

経済の発達 室町幕府の時代は、政治がみだれ、つ
ひには應仁の乱がおこしなど、世の中はおたやかでは
ありませんでした。けれども、その間に國民の生活は
だんだん進み、それにつれて経済も発達しました。

農業はしだいに進んで、米のあとに麥をつくること
も、ひろくおこなはれるやうになりました。宇治の茶
が有名になり、甲州ぶどうや紀州みかんが出はじめた
のも、このころのことです。漁業も盛んで、あちらこ
ちらに水産物を賣り買ふ魚市場ができ、瀬戸内海の沿
岸では塩田を開き、大がかりに塩をとるやうになりま
した。日目の生活に必要な道具を作つたり、外國に輸
出したりしたので、鉄・銅・金・銀などの産額もふえ、
それにつれて鑛業や工業も発達しました。

中國・九州の人民のうちには、遠く支那や朝鮮に渡つ
て、貿易をしたものがありました。取り引きが思ふや
うにならないと、武力をふるふことがありましたの
で、大陸では倭寇といつて恐れられました。

この支那との貿易は、大そう利益になつたので、尊
氏は京都に天龍寺を建てる費用をつくるために、貿易
船を元に送りました。これを天龍寺船といひました。
支那では、元のあとに明がおこりました。義満は、貿
易で利益を得ようと思つて、明と交はりを開きました。
そして明から日本國王といはれ、明へ送る手紙に臣と
書きました。義持の時に、明との交はりをやめてし
まひましたが、義政は、また明と交はりを開いて、盛
んに貿易をしました。明へは、刀や銅その他の鑛産物
や、工藝品を輸出し、そのかほりに、銅錢・生糸・絹
織物・書画などを輸入しました。朝鮮との貿易も、こ
のころ盛んにおこなはれました。

文化の発達 幕府が京都にあつたので、武家と公家

いろいろな物産が、たくさん出まはるにつれ、商業
も進んできました。これまで日をきめて立てられた市
も、あるところでは毎日開かれ、しまひには店になつ
てきました。また京都やその近くに、米や魚だけを取
り引きする進んだ市場さへできました。ここで取り引
きするのは、もう一ばんの人人ではなく、商人たちで
した。

物の賣り買ひに錢を使ふことも、もう一ばんに行き
わたつて、おもに明から輸入した永樂錢が用ひられま
した。それにつれて爲替や問屋のしくみも、ととのつ
てきました。ずつと前から商工業者は、同じ仲間で組
合のやうなものをつくり、領主に税をさめるかはり
に、自分たちだけで商賣することを許してもらつて
りました。これを座といひます。この座も、このころ
になつていよいよ発達しました。

外國貿易 國內の経済が発達するとともに、外國貿
易も盛んになりました。蒙古が來襲したのちも、四國・

の仲は、大そうしたしくなりました。將軍は、公家と
同じやうに、朝廷から、高い位をいただき、重い役に
任せられました。武士の生活は、だんだん公家の生活
に近くなつて、武家の文化と公家の文化が一つにまと
まつてきます。また武家が深く禪宗を信じたので、文
化の上に、禪宗のあつさりしたおもむきが加はり、こ
れがひろく國民全体に行きわたりました。

佛教 禪宗は、武家が大せつにしましたので、いよ
いよ盛んになりました。禪宗の僧のうちには、將軍の
政治の相談相手になつたものもありました。義満の
時、京都と鎌倉の五ヶの大きな寺が、五山といはれて
重んぜられました。一方人民の間には、法華宗・淨土
宗・一向宗が、ますますひろまつて行きました。

學問と文學 學問は、おもに公家と五山の僧の間で
盛んでありました。とくに五山では、詩や文章をつく
ることがはやりました。これを五山文學といひます。
また學問は、武家の間にもひろく行きわたりました。

開成^{カウシ}の足利學校には、遠く九州から勉強にきたものもありました。寺の中での教育はこのころになつて、ますますひろまつて行きました。これがのちに寺子屋^{テウシウヤ}になりまふ。

和歌もなほ行はれてゐましたが、連歌^{レンカ}がはやり、武家や人民の間にとくに喜ばれました。連歌は、たくさんの人があつまつて、一つづきの長い句をつくるのです。宗祇^{ソウキ}は連歌の名人として有名な人でした。

美術工藝 義政は、大そう美術がすきでしたので、美術工藝は目だつて発達しました。繪画はとくに盛んで、支那から輸入された宋や元の名画は、人人に大そう喜ばれ画家にはよい手本になりました。画家の中でも雪舟^{セツシュ}が有名であります。雪舟は、支那の繪のかき方を習つて、畢^{ハツ}だけで山や川や湖の景色をかきました。狩野元信^{カノモトノブ}は、わが國と支那の繪のかき方を一しよにして、新しい狩野派をおこしました。これはずつとのちまで盛んであります。

下へ下へと、力のあつたものにつつて行きました。地方でも、古い家はほろびて、実力のあるものがこれにかはりました。かうして、実力のある大名が、新しくおこつて、國國を分け取り、たかひに、勢ひを争ふことになりましたので、この時代を、戰國の世ともいひます。

大名の分立 關東では、關東管領の家もいつのまにかおとろへ、部下の上杉氏が勢ひがありました。これも新しくおこつた北條氏に、追ひはられてしまひました。中部地方では、越後^{エチゴ}に上杉氏、甲斐^{カウシ}に武田氏^{タケダ}がをり、駿河^{シュンガ}では今川氏が勢ひがありました。中國地方では、はじめ大内氏^{オウナ}が榮えてゐましたが、のちに毛利氏^{モリ}がこれにかはりました。四國の長宗我部氏^{ナガソノガベ}、九州の大友氏^{オホトモ}・龍造寺氏^{リョウゾウジ}・島津氏^{シマヅ}などが勢ひを持つてゐました。これらの大名は、すぎがあれば隣りの國を攻めとらうとしてゐました。そしてよい政治をして、自分の國をよく治めました。中でも北條氏や、武田氏の政治

工藝では、刀のかざりに金銀の手こんだ細工をする後藤祐乗^{ゴトウユウモリ}といふ名人が出ました。そのほか、蒔繪^{マキエ}や陶器^{タウキ}もりつばなものがたくさんでましました。

風俗と生活 武家のすまひは書院造^{シヤウインゾウ}といつて、今の私たちの家に近いものになりました。これは禪宗の書院のつくりをまねたもので、玄關や床の間をつけ、部屋は障子でしきり、疊をしくやうになりました。庭には水と石をうまくとりあはせて、せまい庭をひろく見せ、深山のやうなしづかな氣持を出さうと工夫しました。今も京都の寺には、このころのりつばな庭がのこつてゐます。茶の湯^{チャノユ}や生花^{ナマハナ}がはじまり、能^ノや狂言^{キヤウゲン}が喜ばれました。七月のお盆に、人人が集まつてをどる盆踊^{ボンヨウ}もこのころから盛んになりました。

四 新しい時代への動き

世のありさま 應仁の乱からのち、幕府の力はおとろへてしまひました。將軍はただ名だけで、実権は、

はりつばなものであります。

大名のゐる城のまはりには、たくさんの人が集つて、にぎやかな町になりました。これを城下町^{シヤウゲジョウ}といひます。城下町は、しぜんに、その地方の、政治や商工業の中心になりました。大名がとくに力をいれたので、農業がはかに発達し、鑛業^{コウガク}の技術も大そう進みました。

皇室のおとろへ これまで領地からあがる税と、幕府がさしあげる費用とで、おくらしになつてゐた皇室は、幕府の力がおとろへた上に、領地は地方の武士がつつてしまつたので、大そうおこまりになりました。御所は荒れても、つくるふことができないありさまでした。

このおこまりのありさまを知つた地方の大名の中には、すすんで皇室の費用をさしあげるものが多くなつてきました。

世界の波 このやうな時に、ヨーロッパ人がはじめ

て渡つてきました。ヨーロッパでは、このころ航海術が進み、ポルトガル人にアフリカの南をまはつて、インドにける航路を発見しました。そして東洋の國國と盛んに貿易をしてゐました。天文十二年（西暦一五四三年）ポルトガルの商船が、九州の南の種子島に流れつきました。そしてわが國に鉄砲をつたへました。鉄砲は、これまでの武器にくらべると、すつとすぐれてゐましたので、たちまち全國にひろまりました。まもなく堺をはじめ、各地で鉄砲がたくさんつくられるやうになつて、これまでのいくさのやり方は、變つてしまひました。こののち、イスパニヤの商船もくるやうになり、ポルトガルの商船と一しよに貿易をしました。この人人は、みな南の方からくるので南蠻人といはれました。これからわが國は世界の歴史の仲間入りをするやうになりました。

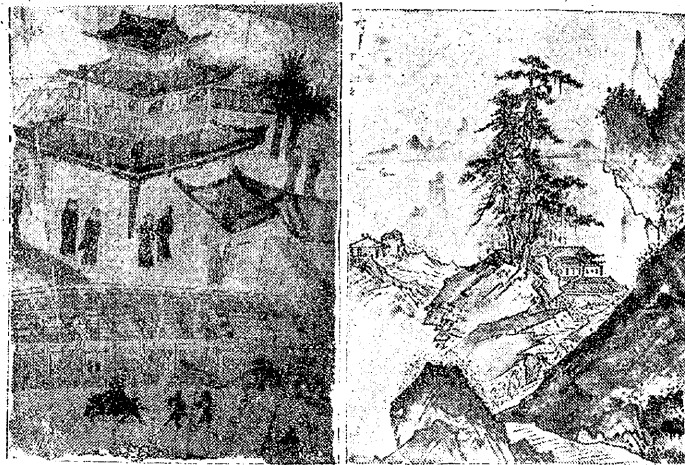
また天文十八年（西暦一五四九年）には、クリスト教の宣教師フランシスコザビエルがきて、その教へを

つたへました。わが國では、この教へを、きりしたん宗といひました。

このやうに、國の内からも外からも、新しい世の中が生まれる動きがおこつてきました。駿河の今川義元、越後の上杉謙信、甲斐の武田信玄らは、早く京都にのぼり、皇室をいただいて、國內を一つにまとめようと思ひました。けれども、みなその目的をとげるこ

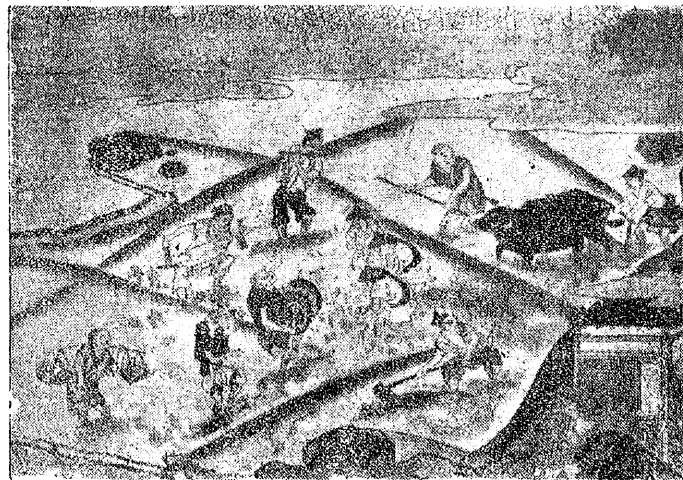
問題

- 一 鎌倉幕府はなぜおとろへるやうになつたのでせうか。
- 二 建武の中興が失敗したのはなぜでせうか。
- 三 この時代の美術はどうして發達しましたか。
- 四 ヨーロッパ人が渡つてきてから、世の中にどんな変化がおこりましたか。



南 禅 寺

雪 舟 の 繪



庭 町 こ ろ の 農 村

第六 安土と桃山

一 國內の統一

安土の城 織田信長の家は、もと管領斯波氏の部下で、代代尾張に住んでゐました。信長が、東隣りの今川義元をたふしてから、にはかに、勢ひが強くなりました。

正親町天皇は、信長の名をお聞きになつて、領地を武士の手からとりかへすことを命ぜられました。このころ京都では、將軍義輝が部下に殺されたので、弟の義昭が信長をたよつてきました。信長は、すぐに義昭と一しよに京都のほり、朝廷に願つて、義昭を將軍にしてみもらひました。

信長は、長い間、荒れたままになつてゐた御所の、つくりかへをはじめました。ひまをみては、自分で、工

事を見まはりましたので、二年あまりのうちに、すっかり見ちがへるやうになりました。このちも、御領地を、とりかへしたり、御費用をさしあげたりしました。

義昭は、はじめのうちは、心から信長をたよりにしてゐましたが、信長の勢ひが強くなるのを見て不安になりました。信長を除かうとしましたが、かへつて信長に京都を追ひはられてしまひました。時に天正元年（西暦一五七三年）でありました。尊氏が幕府を開いてから、二百三十年あまりで、室町幕府はほろびました。

この間に、信長は、近江の安土に大きな城をきづいて、全國統一の仕事を進めて行きました。

信長は、このち徳川家康と一しよに、甲斐に攻め

入つて、武田氏をほろぼしました。また部下の羽柴秀吉をやつて、中國の毛利氏をたせました。秀吉をたすけに行かうとして、安土をたち、京都の本能寺にとまりましたが、部下の明智光秀に殺されました。このために、全國統一の仕事は、中途でつまづきました。信長の志をついで、これを成したのが秀吉であります。

全國統一 秀吉は、信長が殺されたしらせをうけ、と、すぐに毛利氏と仲なほりをして、光秀をほろぼしました。そして信長の部下もつぎつぎに秀吉にしたがひました。徳川家康とも、一度は尾張で戦ひましたが、まもなくこれと手をにぎりました。それから四國の長宗我部氏、九州の島津氏をたがへ、最後に四國の北條氏をほろぼして、全國統一の仕事をしたのであります。天正十八年（西暦一五九〇年）のことです。應仁の乱から百三十年あまりで、國內はやうやく平和になりました。

聚樂第 秀吉は、光秀をほろぼしたのち、大に大きな城をきづきました。城のまはりには、にぎやかな町になりました。大阪の榮えるもとができたのです。全國統一が進むにつれて、秀吉は、高い位に上り、關白に任せられて、豊臣といふ家の名をたまはりました。秀吉は、京都に聚樂第をつくり、ここに後陽成天皇の行幸をあふぎました。この時、皇室に御料をさしあげ、公家にも、それぞれ領地をおくりました。

新しい政治 信長や秀吉は、いつも國全体のために考へて、いろいろ新しい政治をしました。

まず、農業は、一ばん大せつな産業でしたので、そのちになる土地を、しらべることがはじまりました。信長も秀吉も、新しく、土地のひろさをはかり、その良しあしを、きめて、米のとれ高を計算させました。これを檢地といひます。秀吉は、全國の檢地をしました。

この檢地で、これまで、莊園ごとになつてゐた土

地のはかり方や、よび名が、すっかり一つになりました。

わが國では、これまで、長い間おかねをつくりませんでした。それで、おもに明から輸入した、永樂錢が使はれてゐました。その中にはいろいろ質のよくない錢がありましたが、物を買ふのに不便なときがありました。

このころ鑛業が発達して、金や銀や銅がたくさん出ましたので、秀吉は、これで金貨や銀貨や銅貨をつくつて、人人の不便をのぞかうとしました。金貨はその大ききで、大判・小判といはれました。

戰國の世には、大名は、敵に攻められることを心配して、人人の不便などは考へずに、道路は荒れたままにしておきました。そして、岡さかひの大事などころに關所をつくり、通る人をしらべて、人馬や荷物などに税をかけました。信長は、道路をつくつたり、橋をかけたりに上り、關所をすつかりやめてしまひまし

なつたわけでは、これを刀狩といひます。

二 外交と文化

外交の失敗 秀吉は、早くから海外に力をのばさうと思つてゐました。全國を統一したのち、明をうつばかりごとく立て、朝鮮にその道案内をたのみました。けれども朝鮮は、明の勢ひを恐れて聞き入れませんでした。で、まづこれをうつことにしました。

文祿元年（西暦一五九二年）大軍が朝鮮に向かひました。秀吉は、肥前ひぜんの名護屋なごやにゐて、これをさしづしました。わが軍は、その都みやこの京城けいじやうをおとしいれ、朝鮮をたすけにきた明の兵をうち破りましたが、海軍がふるはないので、食糧しきりやうを送るのに大そうこまりました。やがて明から申し出できましたので、ひとまづ仲なほりをするにしました。これを文祿の役といひます。

けれども、この仲なほりの約束に行きちがひがあ

た。これで、どれだけ便利になつたかわかりません。秀吉は、これまでまちまちであつた、道のりのはかり方を改め、おもな道路には、一里ごとに塚をつくつて、道のりをはつきりさせました。

戰國の大名の中には、これまでの座をやめて、誰でも自由に商賈しやうがができるやうにしたものがありました。信長や秀吉も、これと同じやり方で商工業をすすめた。そこで交通は便利になり、商賈も自由にできるようになつたので、城下町はにぎはひ、商工業も大さう発達しました。

戰國の世では、領主の命令があれば、誰でも、武器をとつて戦はなければならませんでした。世の中を平和にするには、それぞれ自分の仕事に力をいれさせることが大せつであります。それで秀吉は、武士以外のものから、刀や槍や鉄砲をさし出させました。これでも武器を持つものと、持たないものとの區別がはつきりました。農民は、平和に農業をはじめばよいことに

り、明から秀吉を日本國王にするといふ手紙を送つてきました。秀吉は大そう怒つて、慶長二年（西暦一五九七年）ふたたび大軍を朝鮮に攻め入らせました。今度は、文祿の役のやうにうまく行かず、朝鮮の南部で苦しい戦ひがつづきました。そのうちに秀吉が死んだので、ゆゑごんにしたがつて、將士はみな國に歸りました。これを慶長の役といひます。

この役は、七年もかかつて、多くの人の命とたくさん費用をむだにただけでありました。

少年使節 信長は、きりしたん宗をひろめることを許しましたので、京都や安土に教會堂けいぐわんどうが建ち、學校もできました。この教會堂を人人は南蠻寺といひました。大名の中にも信者が多くなりました。九州の太友・大村・有馬の三人の大名は、ことに熱心な信者で、天正十年（西暦一五八二年）には、はるばるローマ法王ローマほうわうのところに使ひを送つたほどでありました。この使ひにえらばれたのは、伊東満所いとうまんじやう、千々岩清左衛門

らで、みな十歳あまりの少年でした。少年ころは、ローマで大へんなもてなしをうけ、いろいろめづらしいみやげ物をもらつて、天正十八年（西暦一五九〇年）に帰りました。

秀吉は、九州をしたがへてから、きりしたん宗をひろめることを禁じました。けれども、ヨーロッパの國との貿易は許しました。マニラにゐるイスパニヤの総督やゴアにゐるポルトガルの総督に、貿易のことで手紙を送つてゐます。

桃山文化 このころは、古いものがすたれて新しいものがおこり、長い間の世のむだれが治まつて、平和になつた時でありましたから、世の中はみないきいきとしてゐました。また信長や秀吉は、のびのびとしたことをこのみしましたので、文化の上にも、しぜんにその氣持が表れました。秀吉が年をとつてから住んでゐた伏見城のあとを桃山といひましたので、これを桃山文化といひます。

松原で、大がかりな茶の湯の會をして、茶の湯のすきな人は誰でも仲間に入れました。

問題

- 一 秀吉は、全國を統一してからどのやうな仕事をしましたか。
- 二 刀狩があつて、世の中はどんなに変わりましたか。
- 三 きりしたん宗がひろまつてから、どういふことがおこりましたか。

信長や秀吉は、安土城・大阪城・伏見城などの、大きな城をさづきました。京都の西本願寺の唐門は、このころ伏見城にあつたものです。城の中には、ふだんに住む書院造の家も建てられました。書院造は、ますますつばになつて、美しい繪をがいたふすまや、こみいつた彫刻でかざられてゐました。繪では狩野派が大さう盛んで、永徳や山樂のやうな名人が出ました。そして、金や濃い緑の色を使つて、大きな繪をかきました。

京都で、美しい金襴が織りはじめられ、西陣織の発達するもになりました。文祿・慶長の役の時、九州の大名のうちには、朝鮮の陶工をつれて歸つたものがありました。これから有田焼や薩摩焼などがおこりました。

茶の湯はますます盛んになりました。千利休が、茶の湯の作法をつくりあげたのは、このころのことです。秀吉は大さう茶の湯がすきでした。京都の北野の

年表

西暦
300年

移りかはり

おもな事から

題目 朝鮮 支那 西洋

400年

地方の諸豪族

391 朝鮮に兵を送る

500年

蘇我氏

536 倭寇つたはる

592年 聖徳太子

593 聖徳太子崩御となる

700年 天智天皇

645 大化の改新はじまる

800年 藤原氏

701 大賀郡分かてきる
710 奈良を都とする
741 興福寺を造る
794 平安京を都とする
801 坂上田村麻呂親政をしつめる

900年 藤原氏

836 藤原氏親政となる
894 遷都(平)をとりやめる
901 菅原道真(大)宰相にうつされる

1000年 藤原氏

平安京

1100年 上皇の治

1053 平等院の鳳凰堂がてきる
1089 上皇の政治はじまる

1200年 鎌倉幕府

1167 平清盛(大)大臣となる
1185 平氏(平)はるびる
1192 源頼朝(平)府を開く
1221 承久の變
1224 文永の役
1281 弘安の役
1333 鎌倉幕府(平)はるびる
1334 建武の中興
1392 後醍醐天皇(京都)におかへりになる
1397 金閣がてきる
1439 この頃足利學校が再興された

1500年

1600年

476 西ローマ帝國はるびる

南北朝 隋 唐

871 英國王アルフレッド即位
915 ケンブリッヂ大講堂開かる

1096 第一回十字軍遠征

1215 英國大憲章がてきる
1249 オックスフォード大講堂開かる

1271 ヴェルコ・ボロニャに築城へいたる

1453 東ローマ帝國はるびる

年表

西暦 300年 政權の移りかはり

おもな事から

題目 朝鮮 支那 西洋

400年	聖徳太子	孫氏	地方の諸豪族
500年	聖徳太子	孫氏	地方の諸豪族
600年	聖徳太子	孫氏	地方の諸豪族
700年	聖徳太子	孫氏	地方の諸豪族
800年	聖徳太子	孫氏	地方の諸豪族
900年	聖徳太子	孫氏	地方の諸豪族
1000年	聖徳太子	孫氏	地方の諸豪族
1100年	聖徳太子	孫氏	地方の諸豪族
1200年	聖徳太子	孫氏	地方の諸豪族
1300年	聖徳太子	孫氏	地方の諸豪族
1400年	聖徳太子	孫氏	地方の諸豪族
1500年	聖徳太子	孫氏	地方の諸豪族
1600年	聖徳太子	孫氏	地方の諸豪族
1700年	聖徳太子	孫氏	地方の諸豪族
1800年	聖徳太子	孫氏	地方の諸豪族
1900年	聖徳太子	孫氏	地方の諸豪族

391	朝鮮に兵を送る	本誓京 唐原京 奈良京
538	佛敎つたはる	平 安 京
593	聖徳太子御成となる	平 安 京
645	文化の改新はじまる	平 安 京
701	大宰府合ひてくる	平 安 京
710	奈良の都とする	平 安 京
721	大宰府を造る	平 安 京
794	平安京を都とする	平 安 京
801	坂上田村麻呂親政をしつめる	平 安 京
858	聖徳太子御成となる	平 安 京
894	遣唐使をとりやめる	平 安 京
901	菅原道真大宰府にうつされる	平 安 京
1053	平家源の亂風雲がてくる	平 安 京
1089	上皇の政治はじまる	平 安 京
1167	平家源大政大臣となる	平 安 京
1185	平家はつる	平 安 京
1192	源頼朝幕府を開く	平 安 京
1221	承久の變	平 安 京
1274	文永の役	平 安 京
1281	弘安の役	平 安 京
1333	鎌倉幕府はつる	平 安 京
1384	建武の中興	平 安 京
1392	後醍醐天皇京都におかへりになる	平 安 京
1397	金閣がてくる	平 安 京
1439	この頃足利幕府が再興された	平 安 京
1467	應仁の亂はじまる	平 安 京
1477	應仁の亂終る	平 安 京
1543	ポルトガル人種子島に来る	平 安 京
1549	クリスチ敎つたはる	平 安 京
1573	安土の役	平 安 京
1592	關原の戰	平 安 京
1600	徳川家康幕府を開く	平 安 京
1639	寛永の鎖國令	平 安 京
1684	貞享暦を用ふ	平 安 京
1716	吉原將軍となる	平 安 京
1727	この頃さつまも全圖にひるまる	平 安 京
1774	開闢新宮がてくる	平 安 京
1808	開闢林義雄太衆敎	平 安 京
1853	ペリ来る	平 安 京
1868	三股合子	平 安 京
1889	第二天皇世界大戦はじまる	平 安 京
1914	第一次世界大戦はじまる	平 安 京
1939	第二次世界大戦はじまる	平 安 京
1945	ポツダム宣言受諾	平 安 京

新百新 萬國 萬國	新 羅	高	遼 海	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東	遼 東
-----------------	--------	---	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------

政權のこいところは実権を示す
つすいところは幾分弱いことを示す

K250.32-1-iu

發行所	Approved by Ministry of Education (Date Aug. 16, 1946.)	著作權所有	昭和二十一年八月十六日 印刷印刷
	東京都小石川區久堅町一〇八番地	發行所	昭和二十一年九月五日 印刷發行
日本書籍株式會社	印刷所	定價 金壹圓五拾錢	【昭和二十一年八月十六日交部會檢査済】
	東京都小石川區久堅町一〇八番地	代表者	くにのあゆみ 上
	印刷所	大橋 進一	
	日本書籍株式會社	東京都小石川區久堅町一〇八番地	
		印刷所	
		代表者	
		大橋 進一	
		印刷所	
		日本書籍株式會社	
		東京都小石川區久堅町一〇八番地	

61. 8. 30

安嶋彌氏
寄贈編入乙

